

未完の地方総合文芸誌としての『月刊郷土』

森岡卓司

本稿は、1947年から1948年にかけて山形で刊行された雑誌『月刊郷土』が、地方文化運動の理念を体現する地方総合文芸誌を目指し、頓挫した様相を検証する。この雑誌を刊行に導いた主な動機は、戦争によって外地への移動を強いられた地方出身者たちが抱いた郷土への強い思いであった。しかし、『月刊郷土』は、中央の地方文化論に奉仕するのではない、地方による新たな文化運動を模索する中で、既存の地方文化、および地方そのものへの先鋭的な批判意識を示し始める。結果としてこの雑誌の刊行は途絶することになったが、その経緯には、地方が自らのアイデンティティを問い直す契機が確実に含まれていた。既成の文化的価値基準に依存するのではなく、開かれた文化運動の形態を新たに構築しようという方向性も、『月刊郷土』が示した地方文化理念が持った特質のひとつであった。

Gekkan Kyōdō as an Incomplete Local General Literary Magazine

Takashi MORIOKA

This paper examines how *Gekkan Kyōdō*, a magazine issued in Yamagata in 1947–1948, aimed to embody the principles of the local culture movement and ultimately reached an impasse. The main reason for the publication of the magazine was the strong emotional attachment that the people from the regions who had been forced to relocate to overseas territories because of the war had to their hometowns. This magazine expressed a radical critical awareness for the existing local culture, and offered an opportunity for the regions to reconsider their own identity and form of cultural movement.